
右に鋤を左にスコップを

トモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右に鍬を左にスコップを

【Nコード】

N3886X

【作者名】

トモ

【あらすじ】

森の奥深くに集落がある。都心から離れた田舎の集落に生まれた俺は、両親と同じく畑を耕しながら自給自足の生活をおくっている。別に不満はない。いや、あるにはあるがそれを我慢してないと答える。そう、なにもない。

例えば毎日が鍬を片手に畑を耕してスコップ片手に穴掘りをしていうが、平和ならばそれでいい。それでいいじゃないか！だから俺の平和を脅かさないでくれ。

ああ、俺の背後から息の荒い獣の足音が聞こえてくる。近づいてくる。俺は美味しくないからね？だから、しっしっ！

激情の果ての憎悪（前書き）

初めての連載小説ですが作者が自由気ままな性格の為、いつ更新するかまた本当に更新があるのかは不明です。それを承知の方だけお読み下さい。

激情の果ての憎悪

異世界トリップや転生、チートや英雄、勇者、ハーレムや精霊、ドラゴン

その言葉に胸をときめかせる人たちは多いはずだ。

今は想像よりも妄想をする人も多い。

現代社会で現実にも夢をもたず、別の世界へ夢をもつ人も多い。それを所謂現実逃避と人は言うがまさにそれ。

何がいいいたいか？

別に俺はそういう人たちに偏見があるわけではない。自分の世界に夢見ることも別に俺には関係ないから好きにすればいい。

「萌え」と恥ずかしげもなく口にする人にも正直近づきたくはないが「存在自体消えてくれ！」と願うほどでもない。

そう、別に俺自身に迷惑なんてものをかけなければ誰が何していてもうがまったく問題ではないのだ。

例え俺の目の前で

「るりたんと結婚できないくらいなら殺してやるー！」

と横に大きく離れていても臭う体臭を身に纏ったいかにもオタク男が他の同じようなオタク連中と大きな声で叫びあい、手には銀色に

輝きを放つナイフをもっていようが、俺にさえ迷惑がかからなければ、俺は人混みの中その他大勢の一人として携帯片手に警察へ連絡しようとするだけだったのだ。

なのに、俺はそういう人たち、所謂オタクな輩のせいで九死に瀕している。

「萌え殺すー！！」

萌え殺すってなんだ。

そんな言葉を心の中で呟いている間に、「るりたん」と呼ばれた少女はあろうことが俺のいる人混みに向かって逃げ込んできた。

おい待て、何故こっちに来る。

警察に連絡しようと携帯をズボンのポケットから取り出そうとしていた俺はそのままの体勢で動きを止めた。

るりたんと呼ばれた少女は滅多にお目にかかれないような、これこそ正統派の美少女！というに相応しい美しい少女だった。

でもそんなことは関係ない。はつきりいつて自分の姉と妹を毎日見ている俺には女の裏表を知りすぎていて女に夢をもっていなかった。なのでこの少女にも正直ときめきはしなかった。なのになぜ動きが止まったのか。

いや、止まるだろう。るりたんがあるうことか俺の目の前まで逃げてきて、「萌え殺す！」発言をしたオタク野郎がるりたんを追って俺の方へ突進する勢いで走りこんできたら止まるだろう！！

恐怖で足が竦んだのではない。それは俺の名誉のために断言する。違う。

ではなぜ止めたか。驚いたのもひとつの理由だ。はつきりいうが、オタク野郎の必死な形相は言葉では表せないほどの醜さがあった。人間、ここまで醜くなれるんだな、と感心するくらいだ。

原因はもう一つ！
るりたんが俺の方へ逃げ、あまつさえ、俺の背後に隠れやがったんだ！！

まるで「庇ってください！」「といわんばかりに俺にしがみ付き、この女、凶器をもって突っ込んでくるオタク野郎に俺の身体を押し出しやがった！

目の前の目標がるりたんではなく、俺へとすり替わったのにこのオタク野郎が反応して止まってくれるはずもなく、渾身の一撃ともいえるナイフのぶっ刺しを俺にくらわせやがった。

最初に感じたのは衝撃だった。

その次は痛みよりもまず、俺の目の前にいるオタク野郎の体臭だった。痛みよりもまず体臭を感じるって、どんだけ風呂に入っていないんだよ。

そして後は、頭がショートするんじゃないかというくらいの激痛だ。

痛みが、感情を鈍らせる

痛みが、身体のすべての機能を奪う

痛みが、俺の脳を侵していく――

「っあああああゝあゝあゝ――！……！」

ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな——！！！！

その時の俺は、完全に感情が麻痺していたのだろう。

目の前で呆然と俺を見ているオタク野郎に溢れ出る憎悪。

ふらふらと俺から離れたその男に、俺は、俺の腹に突き刺さったままのナイフを手につかんだ。

「うえ、あ、な、つぐえ、え——」

俺を見て何か言いかけたその男に、俺は突き刺さったナイフを振り抜き、——脳天に振り下ろした。

民衆から悲鳴が上がった。そんなの、俺が知るか。

振り下ろした手から、なにか硬い物を突き破った感触が伝わってくる。それと同時になにかを潰したような気色の悪い感触も伝わった。でも、そんなの関係がなかった。

痛みが俺を襲う。

痛みが俺から思考を奪う。

俺はそれから逃れるために、この男を殺すだけ。

そして俺は、そこでブラックアウトした。

黒の世界の白

世界が廻る、

廻る、

廻る、

廻る

暗闇の中で俺は一人孤独に立ち尽くしていた。
見渡す限りの黒。
俺の目には何も映らない。映るのは純粹なる黒のみ。

「……………」

俺はその世界でただ静かに立っている。
何かを言う気力は残っていなかった。
今だ手に残る気食の悪い感触が頭の中に残っていて吐き気がしそうだ。

この世界は死後の世界なのだろうか。
それとも気の狂った俺の中の世界なのだろうか。

人を殺した俺は気が狂ってこんな世界を創りだしたのだろうか。

そうだ。

俺は殺したのだ。——人を。

「やあれ。やっと思考が働くようになったのだねエ」

「！！」

ぱつと勢いよく振り向けば、そこにいたのは白い物体。

黒が埋め作る空間に明らかな異物。そこだけ刈り取られたかのような白の存在。

真っ白で奇抜な服装に白の仮面で顔を隠し、さらに腰まで伸ばした真っ白なざんばらな髪。

口調もどこか人を馬鹿しているかのようで、俺は一目でその存在を認識した瞬間、嫌悪した。

「やあれ。一目で嫌悪の色を瞳に宿すとは、どおしよつかねエ」

くつ、と喉を揺らす。仮面で隠して表情は見えないが、おそらく笑っている、

いや、嘲笑っているのだろう。

「……………」

「やあれ。また黙り込むのか、キミは。ワタシはちつとも楽しくないよ」

「……………」

「キミは何をそれほど嫌悪を抱くのか、ワタシにはちつともわからないよ。」

何に怒りを抱く？何に哀しみを抱く？何に苦しみを抱き、何に憎悪を湧きあがらせる？

ワタシはちつともわからない。

キミは…、いや、キミたち人間はどオして、それほどまでに感情を宿すのだらうねエ」

愉快、愉快と嗤っているのにも関わらず、仮面の奥から感じる視線からは冷めたもののしか感じない。

仮面の目の部分から見えるはずの目は暗闇のせいか曖昧で、本当に目が存在しているのかもわからない。

わからないけれど確かに感じるその視線に、俺は顔を歪めた。

「やあれ。キミはどオやらワタシと会話をするたびに嫌悪の度がますのだねエ。

不思議なものだ。まるで気が合わないというのも珍しいかなア」

「……………」

「けれどキミの嫌悪に僅かながら怯えも見えねエ。ワタシが恐いのかなア？

それともこの世界に怯えているのかい？やあれ。不思議なものだなア」

首をコテンコテンと左右に傾げる。言葉を切るたびに首を傾げては口元に皮肉の色を見せた。

不愉快だ。どうしようもなく。

一目見た瞬間に嫌悪しか抱けないこの存在に、俺はただ警戒を張りつけてその存在を睨んでいた。

どこか俺の心を読んでいるかのように、俺が警戒を増していくたびに口元が高くつり上がっていく。

不愉快だ。不愉快で仕方がない。この目の前の存在から一刻も早く解放されたい。

沈黙を保っていた俺はそこでやっと言葉を吐き出す。

「……………ここはどこだ」

黒の世界。そしてそこで浮かび上がる異質な白。

俺は俺が刺された瞬間を覚えている。自分は死んだのだ。

なのになぜ俺の思考は働き、痛みもなく、感覚さえもいつも通り。

それはこの世界がそうしているのか。この異質な白の存在が俺を此処に留めているのか。

俺はただ呟く。——ここはどこだ。

「やあれ。口を開いたかと思えば、なんと在り来たりな言葉なのだろうか。

ワタシはちつとも楽しくないよ。

普通という言葉ほど面白くないものはない。平穩という言葉ほど退屈なことはない。

そしてキミのように、当たり前という言葉を吐き出すその言葉ほどつまらないものはない」

だからどうした。いいから俺の質問に答えろ。

そう思う俺とは反対に、口が言葉の音を発することはなかった。

乾いた喉に飲み込んだ唾液が通り抜ける。

粘つく感触に吐き気を覚えるがそんなことよりも白の存在が発する言葉の冷気に、俺はすべての動き止めた。

先ほどまで白の存在のせいで緩んでいた気が、その言葉によって張りつめられた。

「キミを此処へよんだのはワタシだよ。理由なんてどオでもいいよ、あってもないようなものだしねエ。

それに、ワタシに対して理由なんてものを問うほど無駄なものはないよ。

なにせ、ワタシはワタシを楽しませることが出来るものにしか価値を見出せないからねエ。

故に、キミはワタシを楽しませるものとしてよんだのさア」

「たの、しませる……」

「そうそう。此処はワタシの創りだした黒の世界さア。

純粹たる黒の世界、一点の濁りすら許さない高潔なる色。美しい世界だろ？」

その世界にキミをよんだのさア。ワタシを楽しませるものとして、ワタシが招いたのだよ」

「……………」

不気味に歪め高くつり上がった口が寒気がするほど無慈悲な言葉を発していく。

暇つぶし。

純粹で濁りのないその発言に、俺は何かが発火するのを感じた。

「ふざけるな——っ！——！！！」

握りしめた拳がふるふると震える。身体も怒りで震え、湧き上がるのは嫌悪を通り越した——憎悪。

「ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなっ！！！」

溜まりこんだ言葉がまるで噴水のように口から溢れだした。人はこれを——キレた、というのだろうか。

「何が楽しませるものだ、何が美しい世界だっ、何がよんだだっ！全部、ぜんぶっ、——ふざけるなよ、なんで俺がっ、なんで俺なんだ！！！」

「……………」

「俺が死んだのもお前のせいか！俺を此処へよんだんだろう！？なら、俺が死んだのにも何か手を出したのか！俺を殺したのか！俺を死なせたのか！！俺をっ、俺を——っ！！！」

「——答える！！！」

静寂の中に響き渡る俺の怒声。ただただ、湧き上がる怒りのままに叫びが口の中から吐き出される。

何を言っているのか、何が言いたいのか、自分でもわからないまま言葉が飛び出た。

思考は正常には働かず、出てきた言葉を叩きつけるように吐きだす俺の姿は、そいつには滑稽に見えたのだろう。

「ふふふ」

口元を高く吊り上げ、そいつは笑った。いや、嘲笑った。

「ふ、はははははっ——！！！」

今度はそいつの笑い声がその場に響き渡った。口元を隠そうともせ

ず大口を開けて腹を抱えて笑いだす。

何がそんなにもおかしい。何がおかしいんだ。
笑うな。嘲笑うな。嗤うなっ——！！

「これが嗤わずにおられようか！！！」

まるで俺の心を読んだかのように、男は俺に向かって言う。
芝居のように大きな身振りで両手を左右に大きく広げた。

「愉快だ！愉快だとも！！これほど心地の善い叫びは久方ぶりさア
！」

くはっ、と漏れる嗤いにそいつは口に手をやり押える。
しかし手に隠れきれない口の端はいまだつり上がったままだ。

「そうだ、そうとも！ワタシがキミを殺したのさ！！」

「——」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。思考が完全に止まった。
頭が真っ白になった、と表現するのだろうか、これは。

「世界が退屈で退屈で、ワタシはちつとも面白くなかったのだよ。平穩という世界はどこまでも温く、纏わりつくような平和がなによりも退屈！！」

「戦争を忘れた国に価値はなく、蹂躪という言葉を書いた人にも価値はなく！」

殺意という感情を忘れた感情にも価値はない！！」

「ああ、ああ！！なんという愚かしさっ！なんという冒瀆！！この世に生まれたすべてのものは殺し、騙し、壊し、奪い、喰らい、狂い、嗤い、そして犯す！！！」

それが世界に生まれたものの背負うべき感情であり、摂理だ！！」

「それを人は忘れ、下らぬ平穩を望み、平和を望み、争いを忘れ、戦場を忘れ、殺意を忘れ、悪を無に返す！

なんという傲慢でなんという愚かさか！！

人は争わずにはおられず、どんな小さきものにも殺意は宿るというのに、

<良心>という感情がそれを押し殺す！なんという厄介で邪魔な感情だろうか！！」

「だから壊す！すべてを壊すのだ！下らぬ存在になり下がった人間を、感情を、存在を！！」

高らかに嗤いながら、そいつは叫んだ。

まるで目の前にたつ俺ではなく、もっと別な存在に向かって言っているかのように、そいつは俺を通して別のものを見ているかのような感情を目に宿らせた。

溢れ出る感情を止める術はないと、そいつは口を開き、言葉を吐き出し続けた。

「故に選んだ！世界を壊す存在を！そして贈ったのだ、平穏というぬるま湯につかる哀れな世界に！
そして、やはり、」

ふふ、と耐えきれず漏れた嗤い。それに続く言葉はさらに背筋を凍らせるほどの冷たさが含まれていた。

「——世界を壊せた。あのような争いを忘れた世界を壊せたのだ、ああつ、なんとという愉快的なことか」

恍惚と瞳に宿したそいつは、官能なしぐさで自分の首に手を置いた。

「いまやその世界に平穏はなく、世界を壊したあの存在をく魔王とよぶ。

人は異物の侵略を恐れ、怯え、平穏を恋う。

ああ、素晴らしいではないか、人が恐れる様はなんと美しいのだろう」

ぞつとするほどの悪意しかない言葉にもはや俺はついてゆけず、ただそいつを見つめるのみだ。

話の内容も意味がわからず、世界を壊したとはどういうことか、などと聞けるはずもない。

首に置いた手が首を何度もさする。

はぁ、と吐く息には熱がこもり、俺はきつとそいつを薄気味悪いという目で見ているのだろう。

そんな俺の視線をそいつは気付いていないのかもしれないが。

しかしそう思っていた矢先、そいつは今度はしっかりと、俺の存在を認識した。

俺とそいつの目が合った瞬間、俺は見を硬直させ、さらにそいつが続けた言葉に再び思考が止まった。

「そしてキミを殺したのもその一環さア」

そいつの口調が元の調子に戻った。そんなことはどうでもよかった。

「……………は、」

何を言っている。こいつはいきなり何を言った？

「ワタシは平穏を嫌っている。そして、平和を主張するキミの住むあの国に虫酢が走ったのさア。故にその国を壊したかった。

だが、あア、なんという悲しきことか、世界の神がそれを邪魔する。ワタシの接触を阻むのだ。ワタシには介入できず、だが何より嫌うあの国を許すことはできない」

だから、と続くその言葉に俺はその時何を思ったのだろうか。

「国を壊さず人を壊すことに決めたのさア」

「ひ、とを……」

「そうさ、どオしても何かを壊さずにおれなかった。

故に少しばかり人の心に接触を試みたのだが、これが愉快、愉快。簡単に受け入れられたよ、ワタシは」

「……………」

「キミの国はもともとワタシという人外を受け入れてくれる寛容な存在が溢れているからねエ。

その存在をキミのような常識をもつ者は<オタク>と呼ぶのだろオ？」

「……………オタク……………」

「愉快だったとも。ワタシの願いを叶えるかわりに己の願いを叶えよと傲慢に言うあの存在はなんとちつぽけで愚かしいのかと、この私が憐れみを抱いたほどさア」

「そ、れは……あの時、俺を殺した……」

「そうだとも！あの時、あの場にいたキミを殺した男だねエ。

ふふ、あの男の前にくアイドル>なる女と引き合わせてあげたのだよ。

そのあとの展開はあの男が己で引き合わせた事態だったが、これが愉快。

おかげでキミのような存在に巡り合わせてくれたのだから」

いつの間に近づいたのだろうか。そいつは俺のすぐ傍まで来ていた。近くにいればわかる、そいつと俺の差。見上げるほど大きいその存在。

圧倒されるようなその纏う雰囲気、俺は俯いた。

食いしばる歯が唇をぶつりと突き破る。口の端からたらりと流れるものは血だろうか。

握りこんだ拳もわなわなと震わせる。

そいつは何を思ったのか、ぽたりぽたりと口の端から零れる俺の血を真っ白なその手で受け止め、自分の口元にもっていく。

俺は俯いていた顔をそいつの手を追って反射的に顔を上げた。

にやりと妖しく嗤い、そいつは存在の白とは違う赤い舌で、俺の血を舐めとった。

この感情に覚えがある。

この、湧き上がる感情が瞬時に爆発するこの感情は――

「キミに出会わせてくれたあの<オタク>の存在に感謝しよう。
己が刺されながらもあのオタクを憎しみで殺す、心地の良い感情を
曝け出したキミの憎悪に出逢わせてくれたのだから」

――だからキミを此処に連れて来たのだよ

その言葉を聞いた瞬間、俺の『憎悪』が再び目を覚ます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3886x/>

右に鍬を左にスコップを

2012年1月8日01時46分発行